

2025 年 3 月 9 日

大河原さき

類子さん、バイエルン環境賞受賞、おめでとうございます。

バイエルン自然保護連盟、FoE ドイツバイエルン州本部の皆さま、類子さんにふさわしい賞を、ありがとうございます。

類子さんのスピーチを初めて聞いたのは、2011年9月11日の明治公園でした。当時、横浜に住んでいた私は、脱原発グループの仲間と共に公園に向かっていましたが、電車のホームも道路も集会に向かう人であふれかえり、なかなか公園にたどり着くことができませんでした。その時スピーカーから女性の声が聞こえました。それは有名な「私たちは静かに怒りを燃やす東北の鬼です」というスピーチでした。全部は聞き取れず、後から文字になったものを読むと、類子さんの自然観や社会観、生きる哲学が込められていて、原発事故に至った私たちの生活の在り方を問い直し、横に繋がり支え合おうという内容で、とても感銘を受けました。

私は2013年5月に、原発事故で打撃を受けた弟夫婦が、農業再建のために作った農産物の直売所を手伝うために福島に戻りました。類子さんが住むきらは、私が三春に借りた家から車で5分ほどの近さだったので、多忙な類子さんに代わり、飼犬ミチちゃんの散歩をしたり、福島原発告訴団の事務を手伝うようになりました。

その後、原発事故被害者団体連絡会の立ち上げに加わって、類子さんは共同代表となり、私は事務局長となって一緒に行動することが多くなりました。福島県は公共交通が少なく車での移動が多いので、その車中で多くのことを語り合いました。他者を拒まずに受け入れて、ジャッジしないおらかな人となりに触れ、非暴力をベースにした世界観やその実践に共感し、深く思索する中から生まれる言葉に、示唆を得ることが多くありました。このような関係が得られたことに、この場を借りて類子さんに感謝します。

類子さんは自分が今やっていることは、自分たちが快適な暮らしを得るために、汚してしまった環境の汚れを取り除くための雑巾がけなのだと言います。しかし、拭っても拭っても次々と放射能汚染も難題も降りかかってきます。私たちが生きている間にきれいになることはないだろうし、この酷い環境を次の世代に手渡すことになると思うと、絶望の淵に沈みそうになります。

先の「静かに怒りを燃やす東北の鬼」のスピーチ最後の部分は「私たち一人一人の背負っていかなくてはならない荷物が、途方もなく重く、道のりがどんなに過酷であっても、目を逸らさずに支え合い朗らかに生き延びていきましょう」という言葉で終わります。私は「朗らかに生き延びる」境地には未だになれないでいますが、この部分は類子さんの決意表明なのであり、彼女は今もそのように生きています。

絶望から目を逸らさず朗らかに生きていこうという類子さんは、私には地球最後の日が来てもリンゴの木を植える男に重なって見えます。絶望の先にある光を目指して、リンゴの木を植えるその列にこれからも連なって行こうと思います。